

シーツで溺れる恋は禁忌

誰もが誰かの『一番』になりたいと願っている。

誰もが誰かの『一番』になれる可能性を持っている。

けれど私はいつも『一番』になれない。

『二番目』にしかなれない。

誰かの『二番目』——それが私のポジション。

第一章 SIDE 恵菜^{えま}

好きな男以外には触れられたくない。

それが女のセオリーなら、早川^{はやかわ}恵菜にとってやはりこの男は『好きな男』にあてはまるのだと思っ。

薄い唇が肌をなぞる感覚が好きだ。男性にしては細い指も、体を重ねた時の重みもしっくりくる。

セックスに相性があるのだとすれば、まさしく彼との相性はいいのだろう。それともこれは経験を重ねたせいなのか。

男とのセックスを繰り返すたびに、自分の中から生まれてくる女としての悦び^{喜び}。覚えて馴染んでしまった快楽を、知らず自ら追い求めてしまう。

彼がそれを与えてくれるから好ましく思うのか。

恵菜はうつすらと目を開けて男を見つめた。

眼鏡をはずしたその顔は、いつも冷静な彼と違って見える。ムースで固めている髪が一筋、額^{ひたい}にかかる。眉根を寄せて欲に耐える。そんな艶のある姿を見られるのは、きつとこの時だけ。

穏やかで落ち着いた関係は居心地がいい。だからこのままずっと続いていけばいいと思っていた。自分たちの間に激しい恋情はなくとも、人としての好意はあつたはずだから。

「ごめん……」

体を起こしてベッドに座った男の背中を、恵菜はぼんやり眺めた。その背中は広いはずなのに、今は小さく見える。

恵菜はわからないように小さく息を吐いた。

「いいえ。私じゃ高城^{たかしろ}さんを満足させてあげられないみたい」

「そういうわけじゃ」

恵菜もシートで体を覆いつつ上半身を起こした。膝をたてて乱れた髪をかきあげる。ベッドサイドのライトが男の影を壁に映していた。うなだれた影の形にさえ哀愁^{あいきゆう}が漂う。

恵菜の中では、かすかに逡巡^{しゆんじゆん}が生まれていた。

今夜はうまくいかなかった。男性は疲れていればそんなこともある。

このまま黙っていればいいのだ。

彼だって、自分の本音にあえて気づかないふりをしている。

彼との関係をこのまま続けていきたいのであれば、恵菜はなにも言わないほうがいい。彼の本心など見ないふりをして、今まで通りそばにいればいい。

けれど——この男は誰かの『一番』になれる可能性を持っている。

「もしかしてあの子が本命ですか？」

「え？」

「さつきホテルのロビーですれ違った……かわいらしくて、明るくて元気そうな子」

結婚式にでも出席していたのか、甘い感じのする薄桃色のミニドレスを身にまとい、それがとても似合っていた。

彼らは互いに気づくと、ほんの少し戸惑いつつ挨拶を交わした。

彼は『結婚式？』と聞いて、頷いた彼女は『デートですか？ 綺麗な彼女でびっくりしました』

と言った。『君も今日は馬子^{まこ}にも衣装だな』『高城さん、なにげに失礼ですね』と親しげに会話を続けた。

敬語を使っているのに、どこことなく二人の間には対等な空気があつた。

そんな気さくな態度をとる彼を初めて見た。それは恵菜が知らなかった男の姿。

そうして彼女が頭を下げて去っていくと、彼は無意識にそのうしろ姿を目で追った。

おそろくいつもと違う雰囲気に着飾った彼女のかわいらしさに惹きつけられたのだろう。目を細めて、優しく慈しむような眼差しを向ける彼女を見た時、恵菜は男の本心に気づいてしまった。

高城の好みがああいうタイプだとは意外だった。だったら、どうして自分と付き合っているのだろうと恵菜は不思議でならない。

高城が本気になるとしたら、自分みたいなタイプか、もしくはお嬢様タイプの穏やかな女かと思っていた。

恋愛なんかあまり興味がなくて、むしろ出世のための結婚さえしそうな感じもあったのに。

恋愛に興味がないんじゃない。淡泊なわけでもない。

相手が彼女でなければ、彼の熱は生まれただけ。

高城は恵菜の台詞に目を瞠ると、じっと見つめてきた。予想外だったのか反論する術も失っているように見える。

いつも冷静で落ち着いている高城の小さな狼狽を見ると、もつとこんな表情を引き出して、いろんな彼を見つけていきたかったなと思う。

けれどそれを見せてもらえるのは恵菜ではない。

高城はきゅっと口を結んだ後、開いては閉じる動作を繰り返してから最後に細い息を漏らした。

「……なんで、そう思う？」

「あの子に対する高城さんの態度や表情を見て、かな。あんなあなた見たことなかったから」

「そんなにあからさまに態度に出しているつもりはないんだけど」

「こんな風に戸惑っている時点で、あの子が本命だって言っているようなものです」

「君は意地悪だな」

「意地悪ですよ」

彼が前を向いた後、彼女が振り返って見せた表情まで教えてあげるつもりはない。それぐらいの意地悪は許してもらおう。

「今、僕が付き合っているのは君だ」

「そうですね、大人のお付き合いですけど。こういう関係が続けていたら、高城さん、幸せを逃がしちゃいますよ」

「僕は……」

「今なら私、高城さんを笑って見送れます。あの子への気持ちが生きているのを自覚しているんでしょう？ だったら、素直になってください」

「恵菜」

「私、これでもプライドはあるんですよ。高城さんの一番になれそうにないなら、私はリタイアさせてもらいます。シャワー先にいただきますね」

なにかを言いたそうな高城をおいて、恵菜はバスルームへ向かった。

彼の気持ちすべてが自分に向いているとは思っていなかった。

恵菜だって、彼でなければならぬと思うほどの強い気持ちはなかった。

それでも二人で積み重ねてきた時間が確かにあって、肌を合わせて生まれた感情がお互いの中にはあった。

シャワーを浴びながら鏡に映る自分の顔を見る。

泣きそうなその表情で、恵菜は自分が傷ついていることに気づく。

だったら余計なことを言わなければよかったのだ。高城の本心など見ぬふりをしていれば、二人の関係はこれまで通り、淡々としながらも平穩に続いたはずだ。

でも恵菜は今日、彼の本命の姿を目にした。

明るくて元気で無邪気な、まるで恵菜とは正反対の女の子。

素直じゃないところさえかわいらしくて、甘やかしたくなるような存在。

だから傷ついているのはきつと高城のことを好きだったせいではなく、彼の本命を知ったせい。

自分がやっぱり『一番』じゃなかったことを思い知らされたせい。

「やっぱり、ああいう女の子がいいのかな……」

恵菜は思わずそう口にした。その瞬間ある顔が浮かんで、すぐに慌ててうち消す。

鏡には黒髪が肌にへばりついた女の顔が映る。それはまるで醜さと卑しさを内包しているように思えた。

* * *

休憩のために寄った社内のカフェスペースで、恵菜は何気なくスマホの画面を見た。普段はあまり気にしないのに、金曜日の夕方近くになるとこうして確認する癖がついている。それは、この時間帯に高城から誘いのメッセージがくるが多かったせいだ。

別れて数週間経つのだから当然、着信もメッセージもあるはずがない。それでもこんな瞬間、恵菜は不意に高城のことを思い出してしまう。

だけども分かれは未練じゃない。

高城とあの女の子がうまくいったかどうか気になるのは、彼女が恵菜とは正反対のタイプだからだ。彼女の姿を思い浮かべると、自分には女としての魅力がどこか欠けているのかもしれないと気が落ちして、ため息をつきたくなった。

別れを仄めかしたのは自分でも、あの状況だときつと振られたのは恵菜のほうだ。

おかげで惨めな感覚がずっと残っている。

不意に隣に人の気配を感じて恵菜は顔をあげた。

「お疲れ」

「お疲れ様」

同期の男に声をかけられて、恵菜はわずかに緊張した。

堤湊は恵菜と目を合わせることなく、自動販売機の前立って飲み物を選ぶ。海外事業部の彼がこのフロアのカフェスペースに来ることはあまりない。社内でこうして会うのは久しぶりだった。一日の疲れなど感じさせない濃紺のスーツの背中。隙のないその姿は相変わらず独特の存在感を

放つ。少し髪が伸びただろうか。涼し気な目元にかかる前髪が、やけに色気を醸し出している。後輩の女の子たちがこの場にいれば目の保養だと騒ぎそうだが、振られたばかりの恵菜にしてみれば、リア充そうな男の姿はただ気が滅入るだけだ。

こんな時は仕事に精を出すしかない。

自分の部署に戻ろうと椅子から腰をあげかけた時、恵菜の目の前にカップが差し出された。

「なに？」

「ミルクココア。おまえ好きだろうか？」

恵菜は湊をじつと見上げた。

入社当初から落ち着き払った男だった。整った容姿も冷静な仕事ぶりも社内では際立つ。

そんな自分の魅力を存分に理解して、それを上手に利用する強かさもある。年齢を重ねてきた今、そんなささえも魅力の一部になっている。

ただの同期の女の好みを把握している時点で、その手練手管がわかるというものだ。

「……ありがとう」

恵菜はくやしさを隠して素直にカップを受け取った。自分がいつも飲むホットであることがさらに憎らしい。

湊はわずかな距離をあけて恵菜の隣に座る。

「珍しいわね、ここに来るの」

「……まあ、そうだな」

彼の所属する部署の近くにもカフェスペースはある。それなのにわざわざここに来たのは、このフロアに用事でもあったのだろうか。それともお気に入りのドリンクの銘柄でもあるのか。

不意に別の理由を思い浮かべそうになって、恵菜はすぐさまそれを振り払った。

さっさと飲んで仕事に戻ろうと口に含む。

「別れたって聞いた」

火傷しそうなほどの温度ではないのに、口の中が熱くなった気がした。

幸い周囲に人の気配はない。そういうところはきつと抜かりがない男だ。

「そう……傷心なのをからかいにでもきたの？」

恵菜はわざと明るい声で言った。

男と別れたなんて、できれば知られたくない。だから友人にだってすぐに教えたりはしなかった。どうしてこの男に自分のプライベートが筒抜けになるのか、不思議でならない。

「まさか！ 傷心ならメシでも奢ろうと思っただけ」

「ふうん、奢ってくれるんだ」

「ありがとうだろうか？」

そうね、と恵菜は思う。

この男と一緒に食事をしてみたい女はたくさんいる。

湊を誘う女はいても、こうして誘われる女は少ないはずだ。

自尊心をくすぐり優越感を与える。

男と別れたばかりの女には、いつも以上に魅力的に思える申し出。『結構です』と言って断ればいいのに、年を重ねるとずるくなる。

そんな自分が嫌な気もするし、受け入れられるほど大人になったのかもしれないと思う。

「堤くん、残業ないの？」

「あつたら誘わない」

『どうして誘うの？』

いつも口をつけて出そうになる言葉。

それを聞けば、自分たちの関係は呆気なく消えてなくなってしまうほど儂いものでしかない。

「そう。じゃあ今日はイタリアンな気分かな」

「了解。後で連絡する」

湊は椅子から立ち上がると、恵菜の持つカップが空なのを確かめてすつと取っていく。二つのカップを重ねてダストボックスに入れ、そのまま去っていった。

男には二種類。

好きな男か、それ以外か。

もしくは、抱かれていい男か、触れられたくない男か。

堤湊は恵菜にとつて、抱かれていい男だった。

* * *

『堤さん、S社の受付嬢とこのあいださ……』

そんな噂話が恵菜の耳に入ったのは三か月ほど前だ。あの男が恋人と別れると、すぐに女子社員の間で噂になって広まるから、おそらく付き合いは今でも続いているはずだ。

綺麗系よりかわいい系。

しつかりしている女より愛嬌のある女。

気さくで親しみやすく、ふわふわとした女の子らしさがある子。

堤湊が付き合うのはそういうタイプの女だと噂が広がったのはいつだったか。その噂には、でも社内の女とは付き合わないらしいけど——と続く。

だから社内の同期でなおかつ彼の好みとは正反対のタイプである自分が、湊とこういう関係になるとは想像もしていなかった。

この男が選んだイタリアンは、高級すぎず、カジュアルすぎず、なおかつちよつとシックな雰囲気で本命相手にならびつたりのお店だ。

コース料理ではなく、本日のお薦めであるアラカルトをいくつか頼んで二人でシェアをした。

周囲からはきつと仲のいい恋人同士に見えたとはいえない。同期のみんなと集まって食事をする時はなにもせずに飲んでいるだけのくせに、こうして二人きりで食事をする時、湊はあれこれ世話を焼く。

恋人にはマメなんだなど感心したのは、二人で食事に行き始めた最初のほうだけだ。

今ではこんなのは、後の欲望を満たすための初期投資か、お楽しみを盛り上げるための演出でしかないと知っている。

それなのに、湊とプライベートで過ごす時間は心地いい。

落ち着いた口調に低く優しい声音。甘さを浮かべる眼差しに尽きない話題。さりげないエスコート。

女の緊張を解し、なおかつ特別だと思わせて雰囲気酔わせる。

もつと一緒にいたい、離れたくないと勘違いしたバカな女は、食事だけでなくその後の誘いにも簡単にのってしまふ。

(本当に……バカ)

この男の思惑通りに、食事を終えた後、恵菜は湊と二人でホテルの部屋にいた。

ふわりと抱きしめられて顔をあげると、どちらからともなく近づいて目を閉じた。重なる唇の角度と感触で湊とキスをしていることを実感する。

表面だけを軽く触れあわせた後、彼の舌はすぐさま恵菜の唇を割った。そのままゆっくりと舌を絡める。

唇の感触、絡む舌の動き、頬に触れる掌の大きさ、それらは恵菜の記憶にきちんとインプットされている。

こうしてすぐに思い出してしまうぐらいには。

湊の舌は恵菜の口内を確かめるように深く入り込んだ。歯列を舐め頬の裏を探り、舌が届く範囲すべてをゆっくりとなぞっていく。

高城とのキスを塗り替えるのに十分な愛撫。

唾液の味も舌の感触も、これから先にこの男が与えてくるものを思い出させる。

それは恵菜の女のスイッチを確実に押す行為だ。

激しいキスをしながら湊は恵菜の衣服を剥いでいく。ジャケットを脱がしてブラウスのボタンをはずす。スカートのホックをはずし、ストッキングとともにおろしてしまう。

呆気なく下着姿になると、少し乱暴にベッドに押し倒された。

「堤くんっ、待って」

「待たない」

「シャワー浴びたい！」

「それは後」

湊との行為は初めてじゃない。

それでも久しぶりだから羞恥はある。なにより高城とはいつもシャワーを浴びてから始めていた。男と別れたって下着にもムダ毛の処理にも気をつけてはいるけれど、一日仕事を終えた後の汗や体臭までは防げない。

「でもっ！」

「そのままのおまえを感じたい」

恵葉に跨ると、湊はネクタイを引き抜いてシャツを脱いだ。均整のとれた綺麗な裸体が現れ、恵葉は息を呑む。欲を孕んだ男の眼差しに射抜かれれば、拒否の言葉など出てきはしない。

そのまま湊は、恵葉の背中に腕をまわすと、ぎゅっと抱きしめてきた。

「おまえの感触、久しぶり」

かすれた声が恵葉の耳元に吐き出された。

まるで、久しぶりに会えて嬉しいと遠距離の恋人に告げるような甘い囁き。触れたくてたまらな
いと抱き寄せる腕。

恵葉は思わず湊の背中に腕を伸ばしそうになって、それをなんとか止めた。

「なによ、それ」

あえて素っ気なく言い放つ。

自分たちはそんな甘い間柄ではない。

この男が『久しぶり』と思うぐらいの期間、恵葉は他の男と付き合っていた。

男と別れた途端こうして誘ってくるのは、傷心につけ込めば恵葉が落ちることを経験上知っているからだ。

ブラをはずして下着をおろす。恵葉を全裸にすると、湊は肌の感触を確かめるように大きな掌で触れていった。頬から首、そして肩から腕、わき腹を伝って腰を撫でまわし、太腿をなぞる。

恵葉がびくんと反応を返すと、湊は苦笑を漏らした。

「おまえ……今回はなんか、ちよつと開発された？」

「なに、言つて」

見れば湊は目を細めて、感情の読めない複雑な光をそこに宿している。

「反応が違う。他の男に抱かれると、やっぱり女は変わるんだな……」

「嫌なら触らないでよ」

「嫌なんて言っていない……興奮するだけだ」

「バカじゃないのー！」

「ああ、バカだよ」

乱暴に唇を塞がれる。

恵葉の舌は湊の口内に導かれ、小さく痛みを感じるほど強く吸われた。逃れようとすれば拒まれ、舐めては吸うを繰り返される。口の隙間からこぼれた唾液が顎を伝った。

そんな激しいキスとは裏腹に、恵葉の胸を揉む手は優しい。大きな掌で包み込んで何度となく揺らされる。たったそれだけで胸の先端は尖っていた。

さらに尖らせるかのように指で挟んで小さくねじる。指先で外側を小刻みにこすられると気持ちがいいのだと彼は知っている。

舌を絡めて唾液を塗り合うようなキスをしたまま、胸の先をいじられ続けた。

腰が小さく跳ねる。一切触れられていない中心は、はしたないほど潤っているだろう。

「やんっ……んっ」

「いいところは変わっていないな。むしろ弱くなった？」

バカなのは凄じやない。こうして呆気なく反応する自分のほうだ。体は覚えてる。

彼に与えられる気持ちよさも、その先にある深い快樂も。それらに期待しているから素直に体は反応してしまう。

熱い舌がゆつくりと乳首を舐めまわした。激しくされるよりもゆつくりされるほうが気持ちいい。さらに強く吸いつかれればなおさらだ。

「やっ、堤くん、やだっ」

「もしかして胸だけでイキそう？ まじで開発されたんだな」

「違うっ。そんなのっ」

「違うない。」

高城とのセックスの相性はよかった。愛撫は丁寧だったし、じつくりと時間をかけて導かれていった。

指先と舌とで両方の胸の先をきゅつと締められ、恵菜は全身に緊張が走るのがわかった。

「はっ。腹立つ」

軽く達した恵菜に向かつて、強い口調で湊は言い放った。

鋭い胸の痛みを感じながら、けれど恵菜は湊を睨んだ。

他の男に開発された女が嫌なら、抱かなければいいのだ。

それなのに睨んだ先の湊は、はっとしたように恵菜から視線をそらした。

「悪い。腹が立つのはおまえにじゃない……余裕がない俺自身だ」

(なによ、それ……)

謝罪交じりの呟きに疑問が浮かんだのは一瞬で、湊は恵菜の脚を開くと、すぐさま敏感な場所に触れた。すでに濡れていたせいで彼の指はスムーズに動き始める。

達したばかりの体はすっかり目覚めて、恵菜はすぐさま彼の指の動きに翻弄された。

「やっ……ああんっ」

中と外を同時に軽く刺激されると高い声が出た。いやらしい自分の声が嫌で口を手で覆うと、湊はその手を掴んで離す。

「声、聞きたい」

額がつきそうなほど顔を近づけて湊が言った。

合わせた目にはからかいても蔑みもなく、心から願うような真剣さがあった。

「俺を感じる、おまえの声聞きたいんだ」

恵菜の両腕を掴んでひとまとめにすると、湊は軽く体重をかけて覆いかぶさった。ふたたび複数の指が恵菜の中に入り込んでくる。

恵菜の顔を見ながら、湊は探るように優しく指を動かした。漏れてくる蜜の音が、はしたないリズムを刻む。それに合わせて響く喘ぎが嫌で唇を噛めば、湊はぺろりと舌で舐めてくる。

「あっ……んっ、はあん」

感じている顔なんか見られたくない。けれど顔を背ければ湊は恵菜の耳を舐めまわす。下から響

く蜜の音と、耳が濡れる音が重なって恵菜はますます追い詰められた。

蜜で滑りをよくした指先は、恵菜の花芽を優しく撫で続ける。円を描くように動かすその範囲が広がっていつて、大きく膨らんでいることを教えた。

「すっごい濡れている。ほら、掻きだすとたらたらこぼれてきた」

恥ずかしいことを言わないでほしくて首を横に振った。でも彼はきつとそれで恵菜の興奮が増すことに気づいている。

「前はこのへんが感じやすかったのに、今はこっちが好きか？」

「バカ！ 黙って、よ」

言い返すと、戒めるみたいに恵菜の花芽を小さく弾いた。

「ひゃっ、ああんっ」

一際大きな声が出る。そうなるともう恵菜は声を止められなくなった。湊は許さずに反応の強い場所へと刺激を与え続ける。

恋人でもない、ただの同期の男の前であられもない姿をさらす羞恥。

追い詰められて怖いのに、乱れるのを抑えられない。

中をかきまぜられてぐちゃぐちゃになり、卑猥な声を発して淫らな表情を浮かべる自分を、湊はどう思っているのだろうか。

幾度となく達するうちにそんな戸惑いも消えて、恵菜はただ与えられるものを素直に受け止める。大きな声をあげて激しく達した後、避妊具をつけた湊が恵菜の腰を掴んで、ためらうことなく

入ってきた。

「あんっ」

入った瞬間、言い表せない感情が恵菜の中に広がっていく。

『ああ、またこの男と繋がってしまった』そんな後悔と、『もう一度繋がることができた』卑しい喜び。

「恵菜」

そしてようやく呼ばれた名前。

こんな最中の時にだけ呼ばれる自分の名前の響きに、泣きたい気持ちにさせられたのはいつだったか。

湊はすぐには動かずに、そのまま恵菜をぎゅっと抱きしめた。

まるで大事なものを守るような仕草に、胸がきゅっと締めつけられる。同時に勝手にわきあがってくる愛しい感情。

結局——欲しいのはこの男なのだと、こんな時思い知らされるのだ。

湊には恋人がいる。

今の自分は表現するならセックスフレンドで、ただの浮気相手。

幾度体を重ねても、優しくされても、この男の本命にはなれない。

なによりこの男は『恋人がいるのに浮気をする男』なのだ。

(最低！)

浮気をするこの男も、恋人がいると知っていて抱かれる自分も最低だ。

恵菜はその最低な男の顔を記憶に刻むべく、あえて目を開けた。

乱れた前髪が額に落ち、うっすらと汗が浮かぶ。

欲に耐える男の表情はどこまでも色っぽくて、最低な男だと思うのに恵菜の体はきゅっと湊を締めつけた。

「……っ、締めるな、バカ」

「締めてないっ」

「抱くのは久しぶりなんだ。もたないだろうが」

目を細めて声をかすれさせて、まるで欲しかったのだと求めていたのだと言っているようで、首のうしろに手を伸ばして抱きつきたくなる。

そうしないようにぎゅっとシャツを掴んだ。

「悪い。余裕ない。動くぞ」

そう宣言すると、湊は恵菜の膝を掴んで大きく開く。ゆっくり腰を引いた後、それは強引に恵菜の奥を突いてきた。勢いづいて激しく腰を振られると、恵菜の口からは嬌声が漏れる。

「あっ……ああっ、深いっ」

「恵菜、恵菜！」

突かれるごとに動く体を押さえるべく湊は恵菜の腰を掴んだ。名前を呼ばれながら、自分の中を出入りする男の形を思い出す。

そして与えてくる快感を受け止める。

理性を飛ばすような、悪く言えば乱暴で、でも熱を抱かせるセックス。

「はあ、やあっ……ああんっ」

恵菜の気持ちのいい場所を的確に突いてくるのは、それを彼が覚えているからだ。

高城とは得られなかった大きな波が恵菜をさらっていく。

溺れる、と恵菜は思った。また自分はこの男に溺れてしまう。

こうして相手をしてくれるのなら、抱いてくれるのならばたとえ『二番目』でも構わない。

浮気相手でも構わない。

そう思ってしまうほど、湊とのセックスは気持ちがいい。

そんなバカなことを考える愚かさにも恵菜は自分を嘲笑いたくなる。

バスルームに入ると、恵菜は思わず床に膝をついた。

「あの、バカ」

腰が痛くて膝ががくがくする。

どうしてこんな飢えたような抱き方を自分相手にするのか恵菜にはわからない。恋人ではないのだから、少しは手加減してほしいと切に思う。

それとも逆か。

浮気相手だから相手の負担など気にせずに、性欲の赴くまま振る舞うのだろうか。

快楽の余韻が全身に残っていてまだ疼いている。今あの指で触れられれば、体はすぐに目覚めてふたたび素直に反応してしまうだろう。

できることならこのままベッドで眠りについてしまいたい。

恵菜はほんの少しだけお湯の温度を高めにしてシャワーを浴びた。

セックスの後はベッドで戯れることなく、すぐに湊から離れてシャワーを浴びることにしている。あの男が触れた感触も、肌に残る唾液も、感じた証の蜜もすべて洗い流すためだ。

クリトリスは自分で触れてもわかるほど大きく膨らんでいるし、膣の周囲はぬるぬるしたものが残っている。

恵菜はそれも丁寧に洗った。

——堤湊とは同期だ。

知人よりは少し親しくて、友達というには距離がある。

そんな間柄でしかなかった男と恋人でもないのにセックスをする。

自分たちの関係に名前をつけるならセックスフレンドになるのだろう。

いや浮気の共犯者だろうか。

湊とのセックスは気持ちがいいけれど、終えた後はいつも後味の悪い感覚が残る。

恋人のいる男とセックスをするべきじゃない。同期の男に浮気をさせるべきじゃない。

誘われたって断ればいい。

正しい答えがわかっているのにそうできないのは——

恵菜は頭を振って、それ以上深く考えることから逃げた。

バスタオルで体を拭き、忘れずに拾い上げてきた衣服を身に着ける。

湊の前でバスローブを羽織ったことは一度もない。それも恵菜が決めたルールのひとつ。

きちんと洋服を着てバスルームから出ると、まだシートにくるまったままの湊が目細めて恵菜を見た。

「帰るのか？」

「終電はないけど、タクシー拾うから」

情事の痕があらゆるさまなベッドから目を背けて、恵菜は荷物の置いてあったソファに近づく。

「明日は休みなんだから泊まれば？」

首を緩く振って拒むと、バッグを肩にかけた。

「おまえは絶対泊まらないんだな」

不貞腐れたように湊が吐き出す。

『泊まるわけにはいかないでしょう？』その言葉を恵菜はぐっと呑み込んだ。

湊とこういう関係になつてから、恵菜が勝手に決めたルールを彼に説明する必要はない。だから笑みを浮かべて「じゃあね」とだけ言って背を向けた。

湊の隣で眠らない。一緒に朝を迎えない。

だって朝を迎えたら、どこで離れればいいかわからなくなるから。

自分の部屋に戻ると、恵菜は倒れ込むようにベッドに横たわった。シャワーを浴びてすっきりしてきたはずなのに快楽の余韻が全身に残っている。

『恵菜』と呼ぶかすれた声も、肌をなぞる掌の大きさも、耳元で漏らす彼の喘ぎも、果てへと導く彼自身もふたたび記憶に刻み込まれた。

湊との関係が始まった最初のきっかけを恵菜は思い出した。

恵菜たちは同期入社の人数が多い年度のせいかな、定期的に飲み会を開催するほど仲が良かった。数か月に一度の割合で開催されるそれは、仕事の愚痴を言い合ったり、互いに労い合ったり、情報交換をしたりする場でもある。

毎回幹事を引き受けてくれる面倒見のいい男がいて、大抵彼が勝手に日時と場所を決めて連絡してくる。

恵菜は仕事の都合がつけば参加する程度のスタンスだったし、部署の異なる湊とは、同期仲間の一人でしかなく、仲が良くもなければ悪くもないぐらいの浅い付き合いだった。

それでも見た目からして目立つ湊の噂は恵菜の耳にも入っていた。

来る者は拒まず去る者は追わない。だから付き合い合う女は頻繁に変わる。

それでも女遊びが激しいとか、二股をかけているとかいいう話は聞かなかった。

——あの日は人生で一番、最悪な気分で同期会に参加していた。

飲みたくてたまらない心情の時に開催されたから、女友達に愚痴るつもりで出席したのだ。

けれど参加予定だった友人は仕事のトラブルで欠席となり、たまたま席が隣になったのが湊

だった。

入社してしばらくして付き合い始めた年上の男とは、恵菜にしては長く関係が続いていた。それなお互い仕事が忙しくなって、会う時間が減って、そのうち相手から別れを告げられた。

その後、落ち込んでいた恵菜の耳に入ってきたのは、自分と別れてすぐに彼が婚約したこと、相手が妊娠していたこと。

彼が二股をかけていたのか、それともそっちのほうが本命だったのか、恵菜には知りようもなかった。

ただ、いつもこのパターンだった。

『恵菜は俺がいなくても平気みたいだ』とか『甘えてくれないと好かれている気がする』とか言われて振られることが多い。そして別れた後の男たちは大抵、別の女性と新たな付き合いを始めている。

『会いたい』なんてかわいらしく甘えられるタイプじゃない。

『仕事で忙しくて』とデートをキャンセルされたら『無理しないで』と言ってしまふ。

『寂しい』とか『仕事と私どっちが大事なの？』なんて口が裂けても言えない。

おそらく恋人としてはあまりかわいげがない部類に入るのだろう。

だからいつも振られるのかもしれないと、惨めな自己分析をしていた矢先に、その日の同期会ではそんな話題で盛り上がった。

『しっかりしている女よりかわいげのあるほうがいい』だとか『適度なわがままはむしろ甘えてく

れる感じがする』と男性たちが言うのと、『男つてすぐに騙される』とか『そういう女ほど裏があるんだからね』とか言つて、女性たちは反論していた。

だから恵菜も酔つた勢いもあつて、隣に座つていた湊に珍しく絡んだ。

この男が付き合うタイプが甘え上手なかわいい系の女だと話題になつていたからだ。

自分と正反対のタイプの女と付き合う彼に、『甘えられるのつて鬱陶しくないの?』とか『仕事に忙しいのに会いたくないなんて迷惑じゃないの?』とか男性としての意見を聞いては、勝手に落ち込んだ。

結局、女としての魅力に欠けた部分を確認する羽目に陥つて、かなりお酒に逃げた。

湊にはモテる男の余裕があつた。

恵菜の質問にも戸惑いながらも真面目に答えてくれた。ああ、こんな酔つ払いの相手まで丁寧にするなんて律義なところもあるんだと見直した。

砂糖菓子みたいな甘い女とばかり付き合う男。

この男に愛されれば、どんな女もそんな風になれるんだろうか。

きつと彼にはそんな醜い思惑を見抜かれたに違いない――

同期会を途中で抜けて、バーに行つて二人で飲み直した。

『早川の愚痴を聞ける機会なんて滅多にないから聞いてやる』そんな風に言われて、最初は事実を語つていただけなのに、最後に弱音を吐いた。

キスを仕掛けてきたのは湊だったけれど、誘いをかけたのは自分のほうではなかったかと今でも

恵菜は思う。

キスをされて驚いた。彼には恋人がいる。だからダメだと思つた。

それなのに唇の間から入つてきた舌を受け入れてしまった。

最初は驚いてすぐに反応できなかっただけ。けれど緩やかに優しく探られているうちに、酔いもあつてその気持ちよさに身を委ねたくなつた。

激しさを増したキスが終わつて重なつた視線は、互いに欲を露わにしていた。

仕事をそつなくこなし、周囲の噂話も気にせず、冷静に自分のペースを守る男が、今は余裕をなくして男の色香を振りまいている。

それは女の本能的なものを刺激した。

いつのまにかホテルに入つて互いに服を脱がし合つた。

羞恥と理性を取り戻さなくて済むように、後戻りできない状況に追い込みたかつた。

湊は容赦なく恵菜の体の隅々まで暴いたし、恵菜もまたためらうことなく卑猥な喘ぎを聞かせた。『恵菜』と名前を呼ばれるたびに、なぜか大事にされている気がした。

そんなまやかしを与える湊を恨めしく思うのに、快楽に溺れることでそんな感情をなかつたことにした。

湊は恵菜の傷心につけ込んだ。恵菜は酔いのせいだと言いつつ諷した。

それがその日の夜だけの過ちになつていけば、忘れてなかつたことにして、ただの同期に戻れただろうに。

二度目に誘われた時は、食事だけのつもりだったし酔ってもいなかった。三度目は、恵葉の体の事情でホテルへは行かなかったのに激しいキスをした。理由も説明も言い訳も——お互い口にはせず、都合の悪い部分から目を背けて。恋人でも友人でもないからこそ生まれた関係性は最初こそ気楽だった。いつしか、恵葉に新しく付き合う相手ができるかと終わり、別れると始まるという関係になった。誘うのはいつも湊で、恵葉はただ受け入れるだけ。「ねえ、どうして抱くの？ どうして私は抱かれるの？」レースのカーテンの間隙から、淡い月の光が漏れる。理由を深く突き詰めていけば、そこには直視したくない感情がある。眩しくもない月の光を遮るように腕を置いた。同時にそれ以上自分の心と向き合うことも放棄して、恵葉はそのまま目を閉じた。

* * *

湊は『いい店見つけた。興味あるか？』とか『今夜メシでも行こう』とか、食事にかこつけて誘ってくることが多い。彼の目的は、恵葉との食事ではなくその後の行為だ。ただこの男は、セックスのための前座としては雰囲気の良い店を選ぶ。そして二人で過ごす食事

の時間は、恵葉にとっては予想以上に心地いい。

カウンター十席のみの小さな店内は、照明が薄暗いためかシックな雰囲気だ。満席なのにひっそりとしているのは店主が無口だからだろうか。

『雰囲気の良い串焼き屋』だと聞いた通り、カウンターの目の前で、店主は黙々と炭火でいろんな食材を焼っていた。

鶏や豚などの肉だけでなく、旬の魚や野菜などが串に刺さっている。丁寧に下ごしらえされているのが見ただけでわかった。

炭火で焼られると、じゅつと脂が落ちる音がした。煙は大きな換気扇が吸い取るが、おいしそうなのは広がる。

食材にこんがり焼き色がついていく様子を見ると食欲が刺激された。日本酒にもついつい手が伸びてしまう。

「太刀魚を焼ったものです。抹茶塩でもお手製のポン酢でもお好みでどうぞ」

お皿にのせられた串を恵葉は手にした。まずは抹茶塩をつけて一切れ口にする。焼った太刀魚はふわふわとやわらかい。抹茶塩が淡白な太刀魚のいいアクセントになる。

合間にはさまれた青ネギも焼ったことで甘味が増しているようだ。

「おいしい！」

「ああ。うまいな」

周囲の客からも同じような声が聞こえる。だがみんな声を落として会話をしているため内容まで

はわからない。

おしゃべりするためではなく、食事を楽しむためのお店だと思った。

だから湊とも特に話さずとも苦じやなかった。お猪口が空になると、どちらからともなくお酌をする。

「よく知っているね、こんなお店」

「うまいもの食べるのが楽しみで働いているからな」

「そっか」

恵葉は焙^{あぶ}られたばかりのアスパラを口にする。しゃきつとした食感とほくほくの甘味のバランスがいい。

「意外に豪快だよな、食べ方」

申にかぶりついて食べていたからだろう。湊が笑みを浮かべてそう言う。

あなた好みの女の子だったらきつと、お箸で一切れずつ申からはずして食べるのでしょね、と言つてやりたくなつた。

「だつて、そのほうがおいしいもの」

「ああ、俺もそう思う」

嘘だ、と恵葉は思う。

彼はいつも他愛のない嘘をつく。きつと申からはずして食べたつて「食べやすいならいいんじゃない？」と肯定するはずだ。

優しいと評せばいいのか、ずるいと罵^{のの}ればいいのか、湊と一緒にいると時々わからなくなる。

でも、仕事の愚痴^{ぐち}を軽く言えば頷いて共感する。弱音を吐けば慰^{なぐさ}め、アドバイスを求めれば意見をくれる。

彼がモテるのはきつと外見のせいだけじゃない。仕事の能力だけでもない。

恵葉はいつからか、湊の前だと自然に肩の力を抜いている自分に気づくようになった。

どんな男と交際しても、恵葉はつい自分を偽^{いつ}ってしまう。

相手がなにを望んでいるか勝手に想像して、当たり前障^{さむ}りなく振る舞う癖がついている。

だからデートをして帰つてくると、『疲れた』と感^あじてため息をついてしまうのだ。

でも湊とはそれがない。

それが無いことに気づいた時、自分の本音を知つて愕^{がく}然とした。

——恋人がいるのに平気で浮気をする男を好きになるなんてバカげている——そう思った。

食後のお茶をいただいているタイミングで、恵葉はこっそり湊にお札を渡した。会計を済ませる前に払つておかないと、なかなか受け取ってもらえない。

案の定、湊は恵葉が差し出したお札を見て眉根を寄せた。

店内で押し問答^{もんたう}するのはスマートじゃない。だからカウンターの^か下で、渋々お札を受け取つてくれる。

「いらないうつて言っているのに」

財布にしまいながら湊がばやく。

「受け取らないなら、もう食事には付き合っただけいいわよ」
わざと上から目線でふざけて言った。

「おまえらしいけど」

できるだけ彼との食事は割り勘にするように心掛けていた。同期だから互いの給料はなんとなく想像できるし、恋人ではないのだから奢ってもらう筋合いはない。

それに――さすがにその後のホテル代は任せている。

だからきつとこういうのは自分の小さなプライドで、そんな部分にかわいげがないのだろうと自己分析する。

会計を湊に任せて、恵菜は先に店を出た。

このまま同期らしく食事の後は解散すればいい。食事をともにし、仕事の愚痴を言い合うだけの関係に戻ればいい。

通りを行き交うタクシーを見ると、手をあげて停めて逃げ出したくなった。

そんな恵菜の心情に気づいたみたいに湊に腕を掴まれた。何事かと顔をあげれば、すぐうしろを酔った風情のサラリーマン男性の集団が通っていく。

「ぼんやりしていると危ないぞ」

「うん、ありがとう」

そのまま庇うように湊は恵菜の肩を抱き寄せた。その仕草だけで、恵菜の身勝手な願いは呆気なく消えていく。

湊に肩を抱かれて彼の進む方向へ一緒に歩いていく。細くて薄暗い路地へ入って行けば雰囲気が一気に変わる。

そういう目的のホテルがちらほら目に入った。どこへ入るか悩んでいる様子のカップルがいて、このあたりを歩く人々の目的は一緒なのだと思っただ。

大きな手で肩を抱かれると、なぜか守られているような気分になる。こうして密着すれば、男としての湊を意識する。手の大きさも抱く力強さも、仄かな匂いも、かすかに伝わる体温も、これからの行為を想像させるのに充分だ。

ホテルの部屋に入った途端すぐさま唇が塞がれた。

アルコールの残りなのか苦味が口内に広がった。その名残を薄めていくように互いの唾液を混ぜ合わせる。恵菜の喉の奥まで探る激しい舌の動きに必死に応える。唾液を与えているのか飲んでいくのかわからないぐらい卑猥な音がした。

ベッドへ――そう言いかけた時、彼の胸元で雰囲気こそぐわなない振動が響く。

それはしばらく続いて、湊は観念したように恵菜をそっと離すと、スーツの内ポケットからスマホを取り出した。

一瞬、かすかに目を細めて画面を確認した後、恵菜に背中を向けてドアのほうへと向かう。

恵菜は唾液に塗れた唇を拭くと、部屋の奥のソファへ移動し無造作にバッグを置いた。

「ああ」とか「うん」とか言う低めの声が聞こえてくる。もし家族や友人なら、恵菜の存在など気にせずに気楽に話すはずだ。

だとすれば電話の相手はおそらく——恋人。

湊が返す言葉は少ない。けれどそれが逆に相手の話をきちんと聞いているように思える。もちろん恵菜に内容を聞かれたくないせいもあるだろう。

ちりちりと小さく胸が痛んだ。

当然ながら恋人は恵菜の存在を知らないはずだ。湊が浮気をしていることなど気づいていない。いや、思いもしていないかもしれない。

湊はきつとバレないように、仕事同様抜かりなくやる。

こんな男やめればいいのに——

自分はやめられないくせに、見知らぬ彼女にそう言つてやりたくなくなった。

自分のバッグの中から、突然スマホのバイブ音が響いて恵菜はびくつとした。

湊がまだ電話中なのを確かめてからスマホを取り出して画面を見た。

大学時代の友人からのメッセージは合コンの誘いだ。

高城と別れたことを知らせた途端のお誘いメールに苦笑が漏れた。二十八歳という恵菜の年齢からすれば、合コンというよりも婚活に近いだろうけど。

出会いなど限られている。

会社と家との往復の日々で交際相手を見つけれないのであれば、他に出会いを求めるしかない。ほんの少しの迷いを消して、恵菜は『了解』とメッセージを手早く打って送信した。

今のうちにシャワーでも浴びようとバスルームに行きかけると、電話を終えたらしい湊が戻って

きた。

「どこへ行く？」

帰るのかとでも問いただしそうな厳しい声音に、恵菜は驚きながら視線でバスルームを示した。湊がほっと安堵したように息を吐く。

「電話、終わったの？」

「ああ、心配ない」

彼女から？ と胸の内だけで問うに留め、恵菜は「そう」とだけ答えた。ダメになったのなら彼はすぐに言うだろう。

「シャワー浴びてくる」

「一緒に浴びるか？」

バカじゃないの！ という感情を隠さずに睨んで恵菜は湊を押し離れた。意地悪そうな笑みを浮かべて湊もすんなり離れる。

セックスフレンドなんて、うまい言葉だと思う。こんなのは所詮お互いの性欲処理でしかない。

だから恵菜は言い聞かせる。

自分もこの男もただ性欲を解消するための相手でしかないのだと。

湊の舌が恵菜の敏感な場所を舐めまわす。左右に大きく広げられた脚の間で、彼の頭が動くたびにやわらかな髪が太腿をくすぐった。露わになった小さな芽を舌で転がし、あふれた蜜を音をたて

て吸い上げる。

「あつ……あんつ」

いやらしい自分の声が部屋に響いた。

自分の唾液を塗ましているのか、あふれる蜜を吸すっているのかわからない彼のささやかな動きに恵菜は翻弄ほんろうされていた。

軽く何度も達しているせいで、体の奥が満たされなくて切ない。

指を入れて激しくかきまぜてほしい。中も外もぐしゃぐしゃにされたい。

恵菜はたまらなくなつて、湊に弱音を吐く。

「やあつ、もう、入れて」

「なにを？ 恵菜」

蜜まみに塗れた口元を乱暴に拭ぬつて、湊は恵菜を見下ろした。

目つきだけはギラギラしているのに、口調はやけに落ち着おいている。自分だけが乱されて快樂らくに溺おぼれている。

「恵菜、なにを入れてほしい？」

湊がなにを言いわせたいのかはわかつていた。普段なら絶対口くちにしない言葉を、この男はあえて引き出ひそうとしてくる。

胸の先を指先でこすりながら、湊は楽しそうに口の端をあげた。こんな時、同期という関係性があるせいで気恥まじずかしさが勝かつてくる。

「恵菜、言えよ」

「やつ、意地悪！」

「じゃあ、誰たれのが欲しい？」

誰たれの、なんて目の前の男のものに決ままっている。恵菜は戸惑とまいつつ答こえた。

「つ、つみくんっ」

「違うだろう？」

湊はじつと恵菜を見つめながら、欲ほしていた場所に一気に数本指を突つ込んだ。

「ひやつ、あんつ」

たまらず声をあげる。

彼の指が出し入れされ、ばらばらに動かされる。卑猥ひわいな蜜の音をわざとたてて、恵菜だけをまた高たかみにあげようとする。

快樂らくに歪ゆがむ恵菜の顔をじつと見つめて、湊は耳元みみもとで囁ささいた。

「恵菜、下の名前を呼よべ」

反射的に恵菜は首を横に振ふった。瞬間、戒いざめるように敏感な芽を弾はかれた。切なさにつきあがられて恵菜は観念する。

「やあつ、湊の！」

こんな最中に彼の下の名前を呼よぶのは恥はずかしい。だからできるだけ呼よばないようにしているのに、湊はそれを知しつてか逆に呼よばせようとする。

「湊のが欲しいの！」

素直に名前を呼んだのに、彼は笑みを浮かべると中と外とを同時に廻り始めた。感じる場所を知りつくした指は遠慮なく中の上部をこすりあげ、同時に膨らんだ芽を撫で続ける。恵菜はたまらず脚を伸ばした。

彼の指をきゅつと締めつけて離さず、まるで自ら貪欲に快感を求めるように。

淫らに体を跳ねさせながら卑猥な声をあげて、恵菜は欲しかったものとは違うものでイカされ続けた。

「つ、つみくん、意地悪よ……」

激しく達して快樂で滲む涙を拭いながら恵菜は湊を話した。批難しているのに甘えた口調になっているのが自分でもわかる。

「湊、だろ。恵菜が最初から素直に名前を呼ばないからだ」

湊はさらに羞恥を煽るように、恵菜の蜜に塗れた指をいやらしく舐めた。

「だって……」

私は彼女じゃないもの、という言葉呑み込んだ。

こんな風に追い詰めてくる彼が嫌でたまらない。それなのに湊は優しい笑みを浮かべて、涙を流す恵菜の舐めにキスを落とす。

頬に張りついた髪を優しくよける指先にさえ体は震えて、恵菜は顔を背けた。

それを阻むように湊は唇を塞ぐ。舌はすぐに恵菜の口内に入り込んでくる。躡けられたせいで恵

菜も素直に舌を絡めた。自分の蜜を舐めていた姿を思い出して複雑な気分になったものの、それはいつもと同じ唾液の味に戻っていく。

敏感になってどこを触られても反応する恵菜に構わず湊は触れ続けた。いやらしいのか優しいのかわからない手つきは、呆気なく恵菜をふたたび快感の海へ引き戻していく。

欲しいものはまだ得られていない。彼の硬いものが肌にあたる感覚に体が震えた。

「あっ！ ああんっ」

いつのまに避妊具をつけたのか、いきなり奥に打ち込まれて恵菜は声をあげた。切なかつた部分が埋められたのに、今度はその奥がさらなる快樂を求めて蠢く。

この男の目にはきつと、いやらしく喜ぶ自分が映っているのだろう。

「はっ……きつっ」

湊はゆつくりと腰を動かす。そうしながら恵菜の頬を両手で固定すると目を合わせた。

「おまえの中に入っているの、誰？」

自分の存在を強調するかのような問い。

恵菜はためらいつつもそれに答えた。

「湊」

情事の最中にしか呼ばない名前。

頭の中でもなぞることのないその言葉が縛りつける楔になる。

ゆるゆると引き抜かれては奥へ突っ込まれる。繰り返される緩慢な動きは、敏感に作り替えられ

た体に甘い痺れを運んでくる。

彼の形を、覚え込ませるかのよう。

引き抜かれることに追いかけてしようとする自分の内側のうねりを忘れさせないように。

「しがみついて、離れねーな」

「言わ、ないで」

「欲しくてたまらないってひくついている。恵菜、いやらしいよ」

湊は目を細めてそう言った。

汗で湿った前髪の奥で軽く眉間に寄せられた皺に、彼が感じているのだと思えた。

恵菜の中に入ったまま湊は首筋に舌を這わせた。同時に彼の手が恵菜の胸をまさぐる。下から持ち上げるように揉んでは、その先端を指先で挟んでこすりつける。

腰の動きを速めて、湊は恵菜の体を揺さぶった。

だらしなく半開きになる口からはいやらしい喘ぎが響き、揺さぶられるごとに淫らに胸が動く。

もっと奥へと湊自身を引き込むように、恵菜は湊の背中に脚をまわして自らもまた腰を揺らし続けた。

彼に乱されるのであれば、いつそ卑猥な自分を彼に刻みつきたい。

かすかにあつた羞恥心を欲望に塗り替えて、恵菜は誰の前でも見せたことのない痴態を湊に見せつけた。

湊に抱かれた後は全身がだるくてたまらない。

ずっと水の中にいたような浮遊感に包まれ、いつそのまま微睡んでしまいたくなる。

湊は使用済みの避妊具を片づけて戻つてくると、ふたたび恵菜を腕の中に閉じ込めた。

終わると抱きしめるのはこの男の癖なのだろうかと思うこともある。

恋人だったら軽くおしゃべりをして、キスをして、そのまま自然に眠りについて朝を迎えるのかもしれない。

恵菜は乱れた髪をかきあげて、なんとか体を起こした。

「帰るのか？」

「ええ」

「帰れるのか？」

その言葉に恵菜は湊を睨んだ。そして腰に巻きついて腕を離す。

「明日は仕事なのよ。もう少し手加減して」

「だから朝まで休めばいいだろう？」

暗に始発で帰れと湊は言っているのだろうが、そんな風にバタバタと朝から慌てるようなみつきもない真似をするのは嫌だ。

いつもと同じように服や下着を集めバスルームに飛び込む。

心地よい倦怠感とは裏腹に、切なさに満たされた胸の痛みに恵菜は蓋をした。

大学の同級生である駒田麻耶こまだまやに誘われて、恵菜は今夜レストランのワイン会に参加した。

ワイン好きが高じてソムリエのセミナーに通うようになった麻耶は、そこで知り合った男性たちとの相席をセッティングしてくれたのだ。

おいしい料理と、料理に合わせて提供されるワイン。

最初はかしまっていた雰囲気も、ワインを楽しんでいるうちに酔いも加わって、フランクなものに変化していった。

ワイン初心者初心者の恵菜は、ボルドーとブルゴーニュの簡単な違いしかわからなかったが、麻耶はワインテージがどうか、右岸と左岸でどう違うとか語っていて、今付き合っている男に随分影響を受けているのが見てとれた。

そうしてワイン会を終えて、男性たちの社交辞令の誘いをかわして、二人でバーに飲み直しにきたのだ。

案内された部屋の席は奥まっっておりカウンターも薄暗いからか、麻耶は今夜の戦利品ともいえる名刺を恵菜から奪い取ると、トランプのカードのように広げた。

「うーん、どれが誰だったか区別がつかないわね」

ワインを飲んですでにほろ酔いかげんなのに、会社名や部署や肩書、裏にプライベートの連絡先

が書いてあるかどうかまで細かくチェックしている。

「気に入った男いた？」

「……どうかな」

今夜出会った男たちの顔を、恵菜は思い浮かべた。

一緒になったテーブルで一人だけ恵菜と同じようにワインに詳しくない男性がいた。恵菜同様ワイン好きの友人に誘われて来たのだというその男性とは、ワインについて語れない分、料理についてコメントし合って話が弾んだ。

恵菜と同年代だったけれど、少し高城に雰囲気雰囲気が似ていた。

ワイングラスを手にする神経質神経質そうな指を見て、それがどんな風に触れるか想像した。

この男に抱かれてもいいか、触れられても嫌じゃないか。

恵菜はいつしかそんな判断基準で男を選別している。

両想いの相手でないとか付き合えないとか、セックスできないとか、そんな初心初心な感情はとつくの昔にどこかにいつている。

「ねえ、今回もやっぱり同期くんとやっているの？」

名刺をまとめて恵菜のバッグの中にしまうと、麻耶がおもむろに切り出してきた。

湊との関係は褒められたものではない。だから女友達といえども話す相手は限られる。過去、不倫経験のある麻耶だから、恋人でもない男との関係をついこぼしてしまった。

それは自分一人で抱え込めるほどの覚悟がない、卑怯な女だという証拠でもある。

恵菜はワインの後に飲むには似つかわしくない、甘めのロングカクテルのグラスに口をつけた。その態度だけで麻耶は正解を導いたようだ。

「いつそ付き合えば？」

「彼女いる」

麻耶が小さく肩をすくめた。

「その男も恵菜が別れるたびに誘いをかけてくるなんて、どういうつもりなんだろうねえ」

「本当、どういうつもりなんだか」

「聞いてみれば？」

身も蓋もない言葉に恵菜は彼女を軽く睨んだ。

聞いてみようと思つた。でも同じぐらい聞いてどうするのだとも思うのだ。

どうせ『ただ単にセックスをしたいから』とか『都合がいいから』とかいった理由でしかない。

あの男なら『大人の付き合いをお互い楽しめればいいだろう？』ぐらいのことは言いそうな気がする。

たとえもし『好きだから、抱いている』なんて言われたとしても信憑性など一切ない。

せいぜい情事の最中の睦言か、都合のいい存在を引き留めるための戯言かと思うだけだ。

なぜなら、湊が付き合う女たちと恵菜はまったくタイプが違う。

不毛な関係を繰り返してきたことから、本命になれないのは明らかだ。

「まあでも、拒まない恵菜にも責任の一端はあるんだろうけどね」

女友達の容赦のない言葉がぐざりと胸に突き刺さる。

恵菜はなんの反論もできずにグラスに口をつけた。水でも飲むような勢いでごくごくと中身を飲み干す。

麻耶の言う通り恵菜が拒否をすれば、そもそもこんな関係は始まりさえしていなかっただろう。

恵菜が拒めばきつと、湊は『そう』と一言言つてすんなり引き下がるに違いない。そして自分たちの関係はあつてなく終わってしまう。

(拒まない……責任)

拒まない理由なんかはつきりしている。

湊に抱かれたいから断らない。彼と少しでも一緒にいたいから浮気相手として応じている。

次の恋人ができるまでの繋ぎと言えれば遊び慣れた女みただけだ。

本当は逆。

彼の一番になることができないとわかっていいるから、二番目でもいいと思つている自分がいるだけ。そう『二番目』。

『一番』にはなれないけれど『二番』にはなれる。

麻耶は恵菜の様子に小さくため息をつく、空になった恵菜のグラスを揺らしておかわりを頼んでくれた。

「永遠に浮気相手であれば、一緒にいられるのかな？」

「本命になりたいから、今夜だつて来たんでしょう？」

麻耶はすぐさま恵菜の言葉を否定する。

「浮気相手は浮気相手、所詮本命にはなれないのよ」
いつもと同じ台詞を麻耶は穏やかに呟いた。

そんな忠告をしても、恵菜が関係を絶ち切れないことはわかっているから、静かに言い聞かせるような優しい口調で。

『やめなよ』、そう言われてやめられる関係なら始まつたりはしない。

止めても無駄だとわかっている『やめたほうがいい』と言いつけるのが麻耶の優しさで、それがわかるから恵菜も新たな恋を見つけようと必死になる。

ホールの中央にかかげられたアーティチョーク型の照明が、心に刺さる刃みたいにきらめいて見えた。

* * *

ランチ後の職場のパウダールームは、噂話に花を咲かせるには好都合の場所だ。

それが嫌で恵菜はいつも空いているフロアまで足を延ばす。しかし今日は珍しく恵菜の後から女子社員が数人入ってきた。

四つある鏡はすべて私たちの顔で埋めつくされる。

気まずい思いをしつつ途中でやめるわけにもいかななくて、恵菜はメイク直しを続けた。

年齢のせいか、乾燥している職場環境のせいか、こうして途中で潤いを与えないと夕方までもたない。

「さつき見た？ S社から来たお遣いの子。海外事業部の堤さんの彼女なんだって」

「あ、だから堤さん彼女を送っていったんだ。もしかして今頃二人でランチ？」

「それを見た私の後輩、泣きそうになった。でも堤さん、社内の女の子とは付き合わないから、あきらめればって言っているんだけどね」

恵菜は最後の仕上げに口紅を塗り終えると、ポーチにメイク道具をしまった。さも、なにも聞いていないような無関心さを装って木目調の扉をあける。

そういえば企画部の——と、話題は別の人へと変わっていった。
湊の噂話を聞くと複雑な心境になる。

彼とは部署が異なるし仕事上の接点もあまりないので、自分と湊が同期だとは彼女たちも知らないのだろう。

『社内の子とは付き合わない』、そんな噂が広がっているためか、彼に興味や関心を抱いたとしても女の子たちはあまり表だって騒いだりはしない。

相手にされないことがわかっているからだ。

『社内の女と浮気はするけどね』と恵菜は心の中でぼやいた。

恋人がいながら浮気をするろくでもない男だなんて、彼女たちは想像もしていないだろう。
(そう、ろくでもない男なのよ)

そして浮気相手になつている自分もろくでもない女だ。

裏切られているとも知らないで、湊の恋人は楽しいランチタイムを過ごしたのだろうか。見たこともなくせに、明るくて素直で甘え上手な女の子らしい恋人の姿が想像できてしまう。エレベーターを降りて出たところで、恵菜は何気なく窓の外を眺めた。

サークル状に並んだレンガのグラデーションと、うまい具合に配置された銀杏の木とのバランスが好きで、恵菜はいつもその公園を見てしまう。

地下鉄の駅に下りる階段の入り口あたりで軽く手を振る女の子と、それを見送る男とが目に入つて恵菜は歩みを止めた。

明るい茶色の髪は毛先だけが軽く内に巻いている。オフホワイトの丈の短いジャケットに花柄のスカートがふんわり広がる。

見るからに甘めな砂糖菓子みたいな雰囲気。

湊はしばらくそこに立ちすくんでいたけれど、ゆつくりとその場を離れた。

彼女が階段を下りきるまで見送つたのだと気づいた瞬間、恵菜は昨夜きた男からのメッセージに返事をしようと決めた。

* * *

男と女が付き合い始めるのなんて本当は簡単だ。

気になる相手がいれば食事に誘う。いい雰囲気でも過こせたらメッセージのやりとりをして、次にかう約束をする。そうして何度かデートを重ねていけばキスぐらいする。それが嫌じゃなければベッドまでいくのにたいして時間はかからない。

二人の関係のはじまりをいちいち言葉にしなくても、自分の気持ちに名前がなくても、いつのまにか付き合いは始まって問題がなければ続いていくものだ。

そのうち恋愛感情が芽生えるのか、なんの感情も伴わないまま終わるのかは、男としばらく過ごしてみなければわからない。

恵菜はワイン会で自分に興味を持ってくれた男からのメッセージに返事をした。

すぐに食事をする日程が決まって、恵菜は今、ワイン会で出会いながらワインに詳しくないという共通点のあつた男——中野啓一なかのけいいちと二人で食事に来ていた。

ワイン会の時からいい人だなとは感じていた。ワインのことなど知らずともそういう場所を楽しめる柔軟性とか、穏やかに話す口調だとか、綺麗な食事の仕方だとかに好感を覚えた。

恵菜は空からになった相手のグラスにビールを注いだ。啓一はコップを傾けて、さりげない気遣いを見せる。

「早川さんも、おかわりは？」

残り少なくなつた恵菜のグラスを見て彼は切り出した。

一重の細い眼は真摯しんしに恵菜を見つめ、優しそうな雰囲気が全体に滲もみ出ている。

「じゃあまた同じものを」

恵葉が答えると、啓一はすぐにスタッフに飲み物を頼んでくれた。

これまで恵葉が付き合ってきた男性は年上が多く、しっかりして落ち着いてどこか余裕のある、女性慣れたタイプだった。

啓一は少し頼りなげな感じだが、穏やかで控えめで同年代ということもあってか気が楽だ。考えてみれば湊以外の同年代の男性と深く関わるのも初めてだと思つた。

ワイン会で出会つた友人たちの話から始まって、仕事の話へと移り変わる。当たり前障りのない話題を広げてさりげなく互いの情報収集をする。

興味のあるものの傾向が似ているとか、価値観にずれがないとかそんなことまで確かめる。

(あざといな……)

恵葉はそう自分のことを評価した。

けれど大概の女性は自分と同じはずだとも聞き直る。

出会つた瞬間ビビッときただの、キラキラして見えただの、この人だと確信しただのそんな経験をする人は一握りだと思つう。

話していくうちにだんだん敬語が消えて、親しげな口調が混ざるようになる。

同年代の気安さは恋人というより友人のような空気を生み出している気もした。

帰り際の支払いで割り勘を申し出れば、啓一は「僕が誘つたんだから今夜は奢らせて」と言つた。

恵葉もここは彼の顔を立てるべきだろうと甘えることにした。

お札を伝えて店を出ると、駅までの道を二人並んで歩く。

さっきまで話が盛り上がっていたのに、今は嘘のように無言だった。

なにか話題をとも思つうのにわざとらしい気がしてなにも言えない。

男と女の駆け引きの時間。

恵葉は大通りを行き交う車の流れを見つめることで小さな緊張をそらす。

このまま駅に着いてすんなり別れるのか、それとも誘いをかけられるのか。

二人きりでの食事に応じていながら、そうなつたらどうなるかこの先を予想していながら、この期に及んで自分がどちらを望んでいるのかわからなかった。

「これからどうしますか？ もしよかつたらもう一軒行きませんか？」

駅への道を曲がつたところで啓一が誘いの言葉を放つ。

自然に歩みが止まった。

敬語に戻つた台詞に、彼の緊張が伝わってきた。

メッセージでやりとりをしていた時から遠慮がちな部分を感じていたけれど、こうして実際に会うと彼のぎこちない一生懸命さが伝わってくる。

「いいですよ」、そう言えばきつと彼はほっとして笑みを浮かべるかもしれない。そして自分たちの関係が一步進むだろうことは経験からも想像できた。

これまでと同様、啓一との時間を少しずつ増やしていつて、湊との時間を減らしていけばいいだけだ。

啓一との関係が深まっていけば、自ずと湊との距離は離れていく。そのため今、恵菜はこの場所にいる。

それなのに恵菜はなんの言葉も発することができなかった。

啓一はかすかに探るような視線を恵菜に向けた。そしてすぐにふっと息を吐いて肩の力を抜く。「やっぱり今夜は帰りましょう。駅まで送ります」

啓一は明るい声でそう言ってくれた。きつと恵菜の戸惑いに気づいて、気に病むことのないよう気遣ってくれたのだと思った。

ふたたび歩き始めた啓一に合わせて、恵菜も足を進めた。

「また連絡してもいいですか？」

その言葉にはすぐに頷く。

ずるいな、と自分でも思う。

啓一はおそらくいい人だ。そして恵菜に興味を持ってくれている。

そんな彼を、湊と距離を置くために利用している。

それでもいつも一縷の期待を抱いてもいるのだ。

もしかしたら湊以上に、この人を好きになれるかもしれないと、好きになれればいいと思っ
ている。

「私からも連絡していいですか？」

だから自分からも歩み寄る。

「もちろん。いつでも連絡して」

嬉しそうにほほ笑んだ啓一の表情には、駆け引きも裏も見えなかった。

* * *

三か月に一度ぐらいのペースで、恵菜たちは同期会という名の飲み会を行う。社内でも仲がいいと評判なため、他の社員からは羨ましがられるほどだ。

同期入社といえども部署が同じになるか仕事で関わりがなければ、滅多に顔を合わせることはない。同期会は互いの部署の情報交換を兼ねていることもあって、結婚や妊娠といったイベントを経ても出席率は高かった。

前回は、この同期会の幹事役である大谷翔の結婚式の二次会を兼ねて実施したので、気楽な飲み会は半年ぶりだ。

店員に案内された障子をあげると、すでにメンバーはあらかじめそろっているようだった。恵菜はさりげなく今夜の出席者を確認した。

髪を短く切って精悍さを増した翔の周囲はいつものように盛り上がっている。すぐ隣には、冷めた様子で輪の中にいる湊の姿もあった。

恵菜は空いていた端の席にこっそり腰を下ろした。

同期の飲み会であるがゆえに始まりも終わりも曖昧だ。途中から来ようと帰ろうと会費さえ払え

ば制約はない。

そんな気楽な部分がこの会が続く理由だろう。

テーブルにはすでに料理が並べられていて、恵菜はとりあえず食べようと取り皿へと手を伸ばした。

「恵菜、久しぶり！ はい、ビールでいいよね？」

挨拶も早々に、同期の中でも仲のいい友人が、手にしていたビールのグラスを差し出した。恵菜は苦笑しつつそれを受け取る。

「久しぶり。元気そうね」

「まあ、元気と言えば元気だけど」

彼女は恵菜の隣に座ると、そう言うなりビールを半分ほど飲んでしまう。

翔の周囲で「わあっ」という歓声とともに「おめでどう」と言い合う声が響く。グラスを打ちつけて乾杯を交わす様子に恵菜が目を向けると「ついに彼も結婚だつて」と、友人が妬^{ねた}ましそうに教えてくれた。

「あの遠距離していた彼女？」

「そうみたい。大谷くんに続いて彼もだなんてね。まだ私たち二十八なのに、独身組がだんだん減っていく……」

彼女の飲むペースが早いのはそのせいかと、残りのビールを勢いよく飲み干すのを見て思った。

「恵菜は抜け駆けしたりしないわよね」

まだ、飲み始めて間もないだろうに目を据わらせて絡んでくる。

以前は短かった髪が今は肩まで伸びて、雰囲気随分女っぽくなった。

女性としての変化が著^{いちぢく}しい年齢なんだと友人を見ていると思う。少しは自分も大人の女性として成長しているのかと振り返ってみても自信はない。

「そんな予定があったら、ここにはこないわよ」

「そうよね、貴重な三連休前の金曜の夜に同期の集まりになんてこないわよね」

「言えている」

本音半分で恵菜が答えると、「同士」と言って抱きついてきた。

三連休、恋人でもいれば二人で予定を合わせて旅行に出かけるのかもしれない。でも恵菜にしているのは、恋人未満の曖^{あいまい}な相手とセフレという虚^{むな}しい存在だけだ。

「プロポーズの言葉は？」なんて幸せそうな質問を受けて、頬を染めている男との差は歴然。そのまま視線をずらすと、湊は翔となにやら楽しげに談笑している。

二人は最初の配属部署が一緒だったせいかわざら意外に仲がいい。

体育会系で体格も面倒見もいい翔と、要領よく立ち回りそつなくこなす湊とはどこか相反するように見えるのに。

結婚した翔、婚約したらしい同期の男、そして恋人のいる湊——男連中ばかり幸せそうで、恵菜も友人のペースに合わせてアルコールを飲んだ。

テーブルに並んだ料理を適当に取り皿にのせながら、彼女の近況兼愚痴^{ぐち}を聞く。

どうやらつい最近まで付き合っていた相手と別れたばかりのようで「男なんかもういい！ 仕事に生きる」なんてリスキーな発言をしている。

結婚適齢期なんて誰が言い出したのか。

おかげで周囲に結婚していく同期が増えていけばいくほど、嫌でも焦燥感を抱かずにはいられない。

友人は愚痴りながら瓶ビールを手にして手酌で注ぎ足していく。ついでに恵菜のグラスにも注いでくれる。

少し自棄になったような飲み方に付き合ううちに、恵菜もいつもより飲むペースが速くなった。

この間別れた高城も、その後本命の彼女とすぐにうまくいったのか、婚約したらしいという噂を聞いたばかりだ。

——結婚願望はある。

でもそれ以上に恵菜は誰かの『一番』になりたいと思う。

お手軽で後腐れのない『二番目の女』ではなく誰かの『一番』に。

そしてできることなら好きな人の『一番』に。

でもそれがどれだけ貴重なことなのか、難しいことなのか恵菜は身をもつて知っている。

恵菜はつい視線を湊へと向けた。彼の周囲には同期の女性たちが陣取り始めて、無駄な挑戦をしているように見えた。

いや、きっとあの男と一番無駄な関係を築いているのは自分だ。

飲み放題に甘えて友人が頼んだらしいチューハイの氷が、からりと音をたてて溶けた。

恵菜はビールを飲み干すと、目の前のそれへと手を伸ばした。氷で薄まったそれはジュースなのかアルコールなのかよくわからない味になっていた。

「早川、そろそろこっちはどう？」

恵菜の目の前に、ぼつたりしたこげ茶色の徳利がふられた。そしてお猪口が差し出される。

翔は「内緒な」と小さく呟いて恵菜の隣に腰を下ろした。友人はいつのまにか別の席に移動したようでそこは空席になっていた。

飲み放題メニューに日本酒が入っていないかと思ったが、恵菜は素直にそれを受け取った。

「ジュースみたいなチューハイじゃ早川は物足りないだろう？ この間は出産祝いありがとう。亜貴も喜んでた」

翔の妻の亜貴も会社の同期だ。恵菜は友人と亜貴と三人でよくつるんでいた。

翔と付き合い始めた頃は彼女の相談によくのつたものだ。

いろいろあつたけれど二人は結婚して、そして子どもを授かった。

「亜貴はどう？ 本当は今夜も来たかったんじゃない？」

「産後の育児疲れでそんな余裕ないよ。俺もさすがに今夜は一次会で帰るつもりだし」

「自分だけ飲むのは心苦しい？」

「まあ、ね」

それでも無事亜貴が出産を終えたからこそ、翔も久しぶりの同期会を開く気になったのだろう。もしかしたら、結婚式の二次会のお礼も兼ねて幹事役を引き受けたのかもしれない。

恵菜は翔に甘えて彼の奢りであろう日本酒を口にした。すっきりとした辛味と深みのある味が広がっていく。

「お祝い喜んでくれたならよかった。もう少し落ち着いたら赤ちゃん見にいかせてもらおうね」

「ああ、ぜひ。亜貴も早川たちに会いたがっているから」

恵菜は翔のお猪口にも日本酒を注いだ。

この男は出会った時から新入社員とは思えないほど貫禄があった。父親になってさらにそれが増したように思う。

亜貴は『安心するの』とよく言っていた。

『彼のそばにいれば大丈夫。そんな気持ちになるの』と。

それは、彼女が翔を信頼している証だ。きっかけは妊娠だったけれど二人が結婚するのは当然だと思えた。

そんな相手に出会えて、結婚できた亜貴が羨ましかった。

彼女の言う『大丈夫』だと思える相手に、自分もいつか出会えることを願っていた。そんな存在ができるはずだと信じたかった。

でも現実には厳しい。

こうして同じ場所にいるのに湊は遠い存在で、ものすごく近くまでいけるのに心は離れている。

「早川もそろそろ落ち着きそう？」

ざわめきに吞み込まれそうな小さな呟きに恵菜はびくっと反応した。だから聞こえなかったふりはできなかった。

「落ち着きそうって？」

もし、翔の耳に届いているとすれば高城と別れたという噂のはずだ。まだ始まったかどうかかわからない啓一との恋ではない。

けれど翔は意味深にじつと恵菜を見つめる。

「この間、見かけたんだよ、早川が男と歩いているの。なんか、今まで付き合っていた男と随分雰囲気違うからさ。もしかしていよいよ本命かなど思ったんだけど」

翔の言葉に恵菜は目を細めた。

自分がこれまで付き合ってきた相手と、啓一との違いなど恵菜にはよくわからない。確かにこれまでは年上の落ち着いた男ばかりで、彼のような同年代はいなかった。

「俺、深読みすぎかな？ 湊もそれっぽいこと言っていたからさ」

恵菜は、ぐつと奥歯を噛み締めた。

動揺を翔に悟られないよう、表情だけを変えないように努力する。

啓一と二人で一緒にいたところを見られた？ 翔と湊に。

そして彼らから見れば、自分たちは「そろそろ落ち着きそうな二人」にでも見えたのか？

「堤くんも……見たの？」

「まあ、一緒にいたから」

「本命っぽいって？」

「ん、ああ」

翔は「おまえとうとう父親なんだって？」と遅れて来た同期に声をかけられて、そちらを向いた。そのまま男性たちの輪にひきずられる。「早川、ごめん」と言っただけで去って行く彼を惠菜は見送った。

惠菜はバッグの中のスマホの存在を思い出す。

今夜の同期会に参加するかどうか湊に聞かれて『少し遅れて行く』と返事をした。彼からは『終了次第いつもの場所で落ち合おう』とメッセージがきた。

啓一と会うようになってから、湊より啓一との約束を優先するようにした。だから最近はずいぶん誘いを断っている。

同期会で顔を合わせるのに、断るのも不自然な気がして、惠菜は随分迷った挙句OKの返事を送っていた。

湊は、惠菜が新しい男と付き合い始めようとしていることを知っている？

それなのに、今夜会おうと誘いをかけてきたのか？

OKの返事をした自分を惠菜は今さらながら後悔した。

うしろめたいことはなにもないはずだ。

湊にとって惠菜はただのセフレであって彼女ではない。

彼には恋人がきちんといるし、惠菜が誰と付き合いおうと自由だ。

けれど彼は、惠菜に恋人と呼べるような存在ができるかと距離を置く。正直、彼のそのスタンスの理由はよくわからないけれど、実際恋人ができた後に誘われたことは一度もない。

惠菜が拒否をするだけでも確信しているのか。

それとも他の男のものになったら興味をなくすのか。

面倒ごとに巻き込まれたくないからか。

啓一と一緒にいるところを見たのであれば、今夜彼は惠菜に『恋人ができたのか？』と聞いてくるのだろうか。

その時なんと答えればいいのか。

啓一とはまだはつきりと恋人同士と言える関係ではない。

何度か食事はしているし、交際を仄めかす言動をすることもある。けれど確定的ではない。だからこそきっぱりと拒む理由がなくて曖昧なまま逢瀬を重ねている。

惠菜の返答次第で、湊との関係が続くか終わるか——今夜決まるのかもしれない。

どうしていいのかわからなくて、惠菜は翔が残した徳利から日本酒を注ぐと呷った。いろんなアルコールが胃の中でちゃんぽんになっている。アルコールに弱いほうではないけれど、今夜はかなりの量を飲んでいる。

いっそ酔ってしまったほうが楽なようにも思えて、惠菜の手はアルコール度数の高いものに自然に伸びていた。

ばらばらになつても不自然ではない二次会の途中で恵菜はその場を抜けた。同期同士で付き合うなんてよくあることなのに、湊に彼女がいるせいで歪になる関係。

待ち合わせ場所を無視して家に帰ることもできた。そうして逃げ出したほうが楽な気もするのに、恵菜の足は自然にそこへと向かつてしまう。

湊との関係を終わらせたほうがいいことははっきりしている。

むしろ終わらせるために行動を起こして啓一と会っているのだ。そうして今までも無理やり恋を始めてきた。

啓一と一緒にいるところを湊に見られたのであれば、ちようどいい。

嘘でも『彼と付き合うことにしたから、もう二人きりでは会わない。セフレは解消』と言えばいい。

そうすれば湊との関係はすんなり終わる。

けれどそれが怖い。

そうすればもう二度と湊との関係は始まらないかもしれないから――

次々と結婚し始める同期たち。

湊だつて今付き合っている恋人と結婚する可能性だつてある。

湊との関係を終わらせたがために、啓一との関係を始めようとしているのに、その恋に踏み出すことをためらっている。

(矛盾はっかり！)

好きな男がいるのに他の男と付き合おうとする虚しさ、いつまでも叶わない恋心を抱く愚かさ。自覚しているがどうすれば想いを断ち切ることができるのかわからない。

恵菜は立ち止まると、ぼんやり夜空を見上げた。

霞のような雲が浮かんで時折丸い月を覆い隠す。

「早川」

名前を呼ばれて振り返れば、湊が近づいてくる。待ち合わせ場所までは少し距離があるのに、わざわざ来たのだろうか。

「遅いぞ。心配するだろうか？」

自然に腕を掴まれる。

恵菜の体を支えるようなその仕草に、自分の体が予想以上にふわふわしていることに気づいた。

「随分、飲んでいたな。大丈夫か？」

飲み会の場で湊と目が合うことなどなかった。

それなのに気にかけていたことを示唆するような台詞が恵菜の心の隙間を埋める。

ずるいな――と思う。

たつた一言でこの男は恵菜の迷いをすぐに消してしまふ。

湊に掴まれた腕がほんのり温かくて体重を預けた。

仕方ないなという風に肩を抱かれると、まるで恋人同士みたいに思える。

なんだかおかしくて恵菜は笑った。
恋人なんかじゃない。

彼には本命がいて自分はただのセックスの相手。決して彼の恋人にはなれない。
会社の同期という不安定な間柄でセックスをしているのに、そこから発展していかないのは湊
その気がないことを充分わからせている。

その事実こんな胸が苦しくなるのなら、セフレ関係などさっさと解消してしまえばいい。恵
菜が拒んでも彼は痛くもかゆくもないのだから。

けれどセフレだからプライベートでの彼を知った。

こうして触れることができて、甘えることができて、まるで恋人のように夢を見られる。
たとえそれが儂い、まやかしかあっても——

「早川？」

湊に顔を覗き込まれそうになって恵菜は背伸びをした。泣きそうなのを誤魔化したくて、彼の唇
を塞ぐ。

道端でキスをするなんて自分らしくない行為も、酔いのせいにしてしまえばいい。

そのまま湊の胸に頬を寄せると瞼で涙を閉じ込めた。

「おまえっ！ 酔っているだろう？」

「酔ってない」

「酔っていないきや、こんなことしないだろうが！」

呆れたように小さく怒鳴るくせに、湊は恵菜の体を支えて抱き寄せた。そうして優しく頭を撫
でる。

胸はひどく苦しいのに、彼のぬくもりに包まれて恵菜は皮肉にも亜貴の言葉を思い出した。

『安心するの』

そう、この腕の中はとても『安心する』。

そう感じてしまうほど気持ちは湊に傾いている。

そばにいればいるほど想いは深まってどんどん欲張りになっていく。

あふれる気持ちのまま想いを告げればきつと、こんな不安定な関係が終わるばかりか同期として
の関係さえ壊れてしまうだろう。

だから、終わらせたいのに壊したくない——矛盾を胸に抱えたまま恵菜は縋るように湊の腕
の中にいた。

「おい……大丈夫か？」

耳元でそう何度も囁かれる。言いながら額の生え際を優しく撫でられる。

啄むようなキスをしては、そっと舌が入れられて緩やかに絡み合う。

まるで波間に揺られているように穏やかに優しく触れられて、甘い痺れがゆつくりと全身に広
がった。

とても大切に抱かれている気がして、同じように相手を抱きしめたいのに腕には力が入らなかつ